No.21

古高取通信

平成27年12月

古高取を伝える会会報

目　次

古高取紹介 ……2
古高取の広場 ……2
窯元紹介 ……4
活動の記録 ……5
なんでも掲示板 ……5

「古高取を伝える」

かって、直方市が作成した「福智山麓総合計画」に陶芸村を作る計画があった。

山麓の一画に陶工を集めて、上野に対する高取をとの想いであったろう。

一時、八山の子孫を招いて窯を開くまでいったが、途中で挫折したという。

私が福智山ダム建設事務所に勤務していた頃、現在十三代八山を継いだ栄作さんが頓野で窯を開きたいというので、探し回って鳥野神社近くに適切な土地が見つけたが、土地の取得が出来ず断念した事を思い出す。

いずれも、うまくいっていたなら花公園と連帯し、山麓の賑わいに貢献できただろうと残念に思う。

ともあれ、直方市は高取焼発祥の地であり、古高取に魅せられた陶工達が、高取焼組合を作って頑張っている現状に、本会も何らの形で寄り添っていければと思う。

隅田　知明

古高取紹介

【内ヶ磯窯跡出土の茶入】

副島 邦弘

胴丸肩付（文琳）茶入

一般的には文琳茶入とも称していいものである。りんご形の丸味を呈する。器高六ｃｍ前後の愛らしい茶入である。出土した場所は、Ⅱ区の水田面で工房跡があったＧ区落込み四層の黒褐色の砂質土から出土したもので、口縁部と底部を欠損しているが肩部に双耳を持つ。胴上半部にヘラ先沈線を施し、全周していない。色調は、焦げ茶色に発色したもので、黒釉が肩から胴部に流れている。内面の胎土を見ると漉土を使用し、釉薬は土灰釉と鉄釉の二重掛けで、器面の発色は飴色を呈し、黒色露先（なだれ）を見せる。復原口径は五ｃｍで口頸部のつくりは丁寧で二ｃｍで直立して口唇部にいたる。胴部最大径六・七ｃｍで、復原底部は四ｃｍである。器壁は〇・三ｃｍ前後を測る。轆轤仕上げ整形である。姿は良い。

胴丸肩付（文琳）茶入

古高取の広場

松岡博和先生を迎えて

副島 邦弘

本年度の学習部会の研修講座のまとめとして、『筑前における茶の湯』ということで、福岡県地方史研究会連絡協議会監事の松岡博和先生に講義をお願いしました。

平成二十七年十一月二十一日（土）直方中央公民館三階の第三学習室で、十三時三十分から十五時三十分迄、資料四枚とスライドを使いながら実施され、その講義の要約は以下の通りである。

筑前の茶湯者として有名な立花実山を中心に話をしていただいた。

講義の前段は、千利休と黒田如水との関係を説明され、豊臣秀吉と利休の関係、そして死に至った原因を、黒田家茶の湯は、藩祖黒田如水が『茶の湯定書』を茶堂（室）の水屋に法度書をはり、三つの定書と結びとして、次のような言葉でまとめている。「右、我流にてはなく利休流にて候間能々守可申候事」というもので、黒田家は利休流の流れをくむもので、茶の湯は利休―古田織部―小堀遠州という正道の流れを保持し、豊臣から徳川将軍家の茶の湯の流れ、すなわち「天下の茶」と称するものであった。これが前段の結びで、いよいよ本題の立花実山と『南方録』の話しに移っていった。

「茶の湯」が「茶道」と称せられるのは、元禄期に入った頃で、利休が死んで百年後であった。丁度「茶道」という言葉が一般化したときに登場するのが『南方録』で、立花実山の編著である。全七巻でその内容は、覚書（利休の基本思想を集約する部分）・会（利休が催した、ある一年の茶会記）・棚（四畳半座敷とその変遷と棚飾り）・書院（書院飾りを図説）・台子（台子飾りの図示と曲尺割理論）・墨引（利休が焼印を命じた秘奥の一巻）・滅後（利休死後に記した秘伝）である。実山が主張した『南方録』成立の経緯については、著者は南方宗啓という禅僧で利休の弟子で直伝の茶書。藩主の参勤交代にお供した折に、京都何某方より手紙をもらって情報を得てその書物の写しを手に入れた。七巻が揃ったのは利休百回の年。元禄三年（一六九〇）であった。書名が無かったので崇福寺の古外和尚に依頼して『南方録』と命名してもらった。

しかしながら疑問点が五点ほどある。①「京都何某」が船中の実山に手紙を出すのは不自然。②南方宗啓の原本未だ発見されていない。宗啓が実在の人物か疑わしい。③実山と宗啓の百年間、その間に伝承者がいない。④写本は全て実山に到達しそれより前には遡れない。⑤利休の頃に無かった用語が使われている。利休時代には茶の湯・数寄が茶道に、路地が露地へ、会席が懐石へと、使用されている。これらを踏まえて評価を加えると編著者立花実山で良質の資料を入手して編集し、著述したもの。元禄三年利休百回忌、当時は利休への回帰が叫ばれていた時期。実山は、利休を顕彰し業績を讃えようとした。権威を持たせるため「利休直伝の茶書」と称したものである。結論的には、『南方録』は立花実山の編纂書であった。

その後、実山は光之が死去した翌年藩主綱政の命によって、現在の飯塚市鯰田に幽閉され、殺害された。宝永五(一七〇八)年十一月十日、享年五十四歳であった。近くの晴雲寺に埋葬され、藩によって博多東林寺へ改葬され墓石も供られた。藩は東林寺に供養田四反五畝余寄進されている。

実山家は孫の太市代に寛延二(一七四九)年に再興され、新規に十五人扶持※として明治維新まで継続していった。

後段には立花秋水と諸九尼との話があり、直方との関係で結ばれた。

事務局として、参加者に対してはお抹茶の接待を行った。

※知行地を持たない家来に与えた玄米。一人扶持は、一日五合で一年分の給与。

「古高取を伝える会」の取組みに参加して

直方市感田　細田 優子

「マイ茶碗」づくりのお手伝いをさせていただいて数年になります。

ほとんどの子どもたちは、初めての茶碗づくり。三～四十分の短い時間集中して、六百グラムの粘土の塊を、なんとか形を整えて「茶碗」に仕上げています。中には本当に器用な子どももいて、初めての作陶とは思えないほど見事な茶碗を作り、驚いています。

同じ丸い粘土からそれぞれの個性が加わった「マイ茶碗」づくりですが、この活動の素晴らしさは、学習の一連の流れにあります。

①「古高取の歴史」の話(ビデオ)→②「マイ茶碗づくり」と焼きあがるまでの工程の話→③マイ茶碗を使っての「茶会と作法の学習」

こうした一連の学習は、「日本の伝統文化」を学ぶ重要なきっかけになっています。この流れを「古高取を伝える会」に携わる人や先生方が、「共通の意識」を持って取り組むことで、さらに深みのある活動になっていくものと思います。

茶碗づくりに使用する粘土のかたまり

直方市独自の取組みとなっているこの活動が今後も継続され、子どもたちの心がより豊かになってくれたらなぁと心から願っています。

マイ茶碗が生まれる瞬間！

小山 利枝

直方のお宝、古高取を地元の小学生に伝承するための焼き物教室に参加させていただきました。

会員として、この活動を継続していくためには、スタッフ充実の必要性を感じ、私の所属している直方北小学校での絵本読み聞かせボランティア仲間に声掛けしたところ、少しでもお役に立てればと快諾してくれました。

私達は陶芸に関しては未経験なので、焼き物教室担当の方の説明を子供たちと同じレベルで横目に受け見よう見まねのお手伝いで、只今修行中といったところです。

準備された土で、茶碗の形にするという簡単な作業のようですが、子供たちの姿は意外と真剣で四苦八苦しながら一生懸命です。個性も様々、世界に一つのマイ茶碗作りのこの現場は結構面白く、こちらもついパワーが湧きます。どんな茶碗に仕上がるかとても楽しみです。

出来上がった子ども達の茶碗

子供達の感想には、こうして陶芸体験できることへの感謝。又四百年前に焼かれていた直方の古高取のことを家族や次世代に自分達も伝えていきたいという頼もしい声もあり、単なる図工授業ではないことを認識させられました。

市内十一小学校の茶碗作りのために下準備から仕上げまで携わって下さるスタッフの皆様お疲れ様です。土から生まれたばかりのマイ茶碗がとても大切に取り扱われていたので、直方の子供たちは恵まれていると思いました。

お陰様で私たち自身も古高取を伝える意味を知るきっかけにもなりました。子供達にとって大切な時間をいただいての焼き物教室ではありますが、又関わらせていただく機会があればうれしく思います。

お世話になりましてありがとうございました。

窯元紹介

高取焼工房　末吉　宏光

いつの頃から、やきもの作りが私の仕事と思い始めたのか、ふと気がついてみたら陶工になっていました。

鳥や蝉や蛙の鳴く声以外は音と言えば工房裏の竹林に風が渡るのみです。

いつもの手馴れた作業にあきるとブラリと散歩に出ます。近くには古窯跡が点在しています。

ただの石ころの様な陶片を手に眺めていると、新たな感動が私を満たして来ます。

近くを流れる沢の水音にも仰ぎ見る鷹取山のみどりにも、四百年も遠い昔の陶工達の声を聞く様な気がします。

当窯元は、現在の地に窯を築いて三十年になります。

上野焼の茶陶で養った技と心を基に、私らしさを求めながら、土に習い土と語らい作陶する毎日です。

どうぞ当窯元に、足をお運びくださいますようお願い致します。

末吉さんは、日本の伝統的な作陶方法を重視している。そうして作った陶器は、すべて一点もので使うほど味がでてきて飽きることがないとおっしゃいました。

また高取焼は、関東や東北地方の方が知られている。もっと他県からも直方の地を訪れてもらいたいともおっしゃっていました。

高取焼工房　末吉　宏光
〒八二二-〇〇〇五
直方市永満寺八九一-三
電話　〇九四九-二四-六五〇〇

活動の記録

●子供焼物教室

〈平成二十七年五月～十月〉
場所：直方市内の小学校

本年度の小学校陶芸教室の作品は、保護者の分を含め学校に届け終わりました。

マイ茶碗作りには、北小学校の読み聞かせのお母様達のサポートなので、多くの人達の関わりの中で継続していけることを感謝しながら、来年度に向けて進んでいきたいと思っています。

ありがとうございました。

末松登志子

●学習部会

〈平成二十七年六月～十一月〉
時間：十三時三十分～
場所：えみくる（直方市中央公民館横）

今年度の学習部会は、「戦国武将と茶の湯」をテーマに全四回の講義と、まとめ講演までを終了しました。残りは、窯元探訪のバスツアーで、左記の予定です。皆様のご参加をお待ち致しております。

【窯元探訪バスツアー】
日時：二十八年三月二十六日（土）
集合：直方中央公民館
コース：佐賀県唐津方面（唐津焼梶原窯・唐津城と付近散策など）
費用：五千円以内
募集人員：二十名
申込：〇八〇-五六〇二-五四五〇（末松）

直方の地元窯元や畑公民館等で、陶器販売はもちろん、地元の農産物や特産物等の販売も行われました。

●金剛山もととり協議会だより

〈平成二十七年十一月四日（水）・十一月二十二日（日）〉
場所：金剛山もととり広場

里山の秋も深まり山々の木々は葉を落し始めました。

今年の紅葉は近年になく悪くがっかりですが、人間の力ではどうすることも出来ない大自然の営みですから、受け止めて来年に期待しましょう。

十一月四日（水）、十一月二十二日（日）に「ちょっくらふれ旅」を実施しました。

定員各三十名は早々に締め切り、後、お断り状態となりました。

あじさい園も市民の知るところとなりつつあります。

これからも皆様が自然回帰出来る場として年間を通して行事をしていきたいと考えています。

来年の三月頃に植樹祭を計画しています。

末松登志子

なんでも掲示板

●第五十一回高取焼陶器まつり

〈平成二十七年十月二十三日（金）～二十五日（日）〉
場所：直方市畑・永満寺地区

●高取焼と筑豊の茶の湯展

〈平成二十七年十一月二十七日(金)〉
場所：飯塚市歴史資料館
（飯塚市柏の森九五九番地一）

当日の天気は曇りで今季一番寒い日であった。現地集合で実施した。

館では、嶋田館長の出迎えを受け、ご挨拶を頂き展覧会場の二階に向かった。

展覧の『高取焼』は、系譜の流れに従って一覧できるものであった。千石・上畑窯跡の発掘調査された陶片を見ることが出来たことは特記すべきことであった。

『茶の湯』関係の古文書として、

当地の鯰田で幽閉され殺された立花実山の「南方録」が中心に展示されていたのも一見であった。

茶の湯会で一番大切な釜（茶釜）は、芦屋釜の一品で、釜の鋳型等が展示されていた。

これと併展されていたのは、NHK朝ドラのヒロイン　アサチャンで名高くなっている『広岡浅子と明治時代の筑豊炭鉱』展も見ることが出来た。また、近くの『麻生大浦荘』の一般公開とあいまって寒さの中三々五々の人出であった。

参加された会員に感謝します。

副島邦弘

●小学校でお茶会！

〈平成二十七年十二月二十一日(月)〉
場所：感田小学校
講師：日隈さん、田中さん、吉田さん

十二月二十一日(月)、感田小学校で、一時間目～四時間目までを使い一クラスづつ、お抹茶の作法を体験しました。

他の学校でも校内や直方歳時館などの場所を使って、ぞれのやり方でお茶会が実施されています。

世界でひとつのマイ茶碗で、小学校の忘れない思い出となるでしょう。

末松登志子

高取焼に関する投稿・感想文をいただきましたので、少しだけ紹介させていただきます。

「茶陶古高取」生産流通の要

古高取研究家　小山　亘

内ヶ磯窯で焼かれた「古高取」は、京都の三条の「せとものや町」と言う陶器商が軒を並べていた地域に運ばれて流通していたことが発掘調査で判っています。そんな特別な地域で陶器商を営んでいた陶工に、新兵衛・吉兵衛・万右衛門と言う人物がいたことを表千家五世の随流斎宗佐が『随流斎延紙ノ書』に「一　新兵衛・吉兵衛・万右衛門、京瀬戸物町にて瀬戸屋なり、作意にて作り、方々へ焼遣候、利休時代にても可有之也」と記しています。

この三人の内、筆者が特に注目してきたのは、これまで何度も『古高取通信』で紹介してきました吉兵衛です。

吉兵衛は、茶器鑑定の手引き書『名物目利書』に「吉兵衛　元江州の産なりしが、瀬戸にても焼申候よし、今京都押小路通り柳馬場東へ入る町に七里市兵衛と云ふ人号を萬屋と云ふ、是吉兵衛の子孫なり、且膳所にて焼物を製し名を国丹焼といひしよし」との記述があり、吉兵衛の一族が拠点としていた場所が、京都押小路通り柳馬場東に入る町と明記されているのです。

京都押小路通り柳馬場東に入る町（中之町遺跡）は、各地で焼かれた桃山茶陶を流通させていた京三条「せとものや町」の玄関口つまり一等地です。ここは、桃山茶陶

が最も多く出土したことでも知られている遺跡で、こうした場所に大店を構えることの出来る一族が小物の陶器商とは考えられないのです。

吉兵衛が遺したと言われる『別所吉兵衛一子相伝書』には、吉兵衛は代々が茶の湯の歴史と共に歩んできた渡りの茶入焼造職人の家柄で、その末裔の養子。千利休・古田織部・小堀遠州・金森宗和と云う一流の茶匠と関わっていた桃山屈指の名工であることが伺えます。そんな吉兵衛に纏わる記録はかなり遺されていて、それらは昭和五十年(一九七五)淡交社発行『原色茶道大辞典』の中に整理集約され別所吉兵衛の項として掲載されています。

別所吉兵衛(べつしょきちべい)…利休時代の陶工で、京都烏丸仏光寺に住し、古瀬戸の模作をしたという。その後は代々押小路柳馬場に住し、七里市兵衛を称し、万屋を屋号としたと伝えられる。なお一説に、吉兵衛は遠州時代の茶入の名工で、瀬戸・伊賀・伊部などに往来し、遠州好みの茶器制作に協力したといわれ、『別所吉兵衛一子相伝書』は彼の筆録であるという。

『原色茶道大辞典』八〇四頁参照

高取割高台茶碗高台陶片(京都市所蔵)

多くの名品と「茶器『二』印は別所吉兵衛」と言う伝承まで遺している京都を拠点としていた渡り陶工の吉兵衛は、李朝陶工で高取焼の開祖と言われる高取八蔵に、日本独自の茶の湯だけに使われる茶入れの秘伝を伝授した師匠に相応しい茶入師であることを、前回の通信二十号で紹介しました。

そんな吉兵衛が遺した『一子相伝書』には、彼の従弟の茂右衛門を高取の窯場(内ヶ磯窯)に茶匠金森宗和の好みを焼き下らせたことまで記されているのです。(通信十一号、十四号参照)

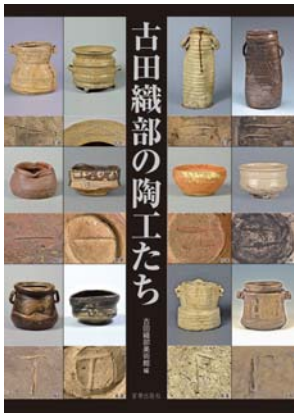
前述の史実と伝承に従うと生産地の内ヶ磯窯跡と流通の拠点である中之町遺跡から出土した、歪んだ「織部好み」の「二」印の茶陶は、渡り陶工で古田織部が選んだ「織部六作」吉兵衛が内ヶ磯窯に訪れて作陶し「せともの町」で流通させていたことが十分考えられることになります。

高取割高台茶碗(京都市所蔵)

これまでに内ヶ磯窯製の「二」印の伝世品と出土陶片の中で姿形の判るものを含めて五十点近くのなかで、驚くことにそのすべてのものが、典型的な「織部好み」と「遠州好み」の姿形であることが判りました。内ヶ磯窯は古田織部と小堀遠州が活躍していた時代の窯で、織部と遠州の目利きは姿形を第一に吟味していたと吉兵衛は『伝書』の中で言っている(通信二十号参照)ことから、「二」印茶陶の作者を吉兵衛だと言っても揺ぎ無いものになりました。

長年にわたる考証の結果、これだけ現場・現物とも整合する史実と資料を的確に遺し確認できる人物は吉兵衛以外にいないことから、「二」印の陶工と確定できた吉兵衛が内ヶ磯窯で焼かれた「茶陶古高取」生産流通の要と言う結論を出し、出版しました。

織部と遠州に関わっていた陶工が二人の好みを制作するのは当然で「論より証拠」「見れば判る」に勝るものはないのです。ここでは紹介できない吉兵衛が各地で製作したものやそれらの分析データーについては、忘羊社発行・拙書『「織部好み」の謎を解く』と古田織部美術館編・宮帯出版社発行『古田織部の陶工たち』に掲載していますので参照していただければ光栄です。



※本文中の写真は、中之町遺跡から出土した内ヶ磯製の「二」印の歪んだ茶碗。古田織部美術館編・宮帯出版社『古田織部の陶工たち』より。いずれも京都市指定文化財です。

古高取を伝える会のみなさんへ

今日は、おいそがしいず、私たちのために、高取焼のつくり方を教えて下さってありがとうございました。

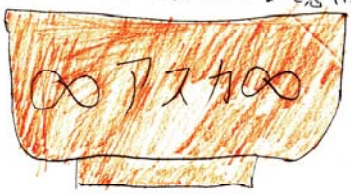
私は、かんたんに作れるといわれて、最初の方は、本当にかんたん作れるんだと思いましたが、とちゅうから、ムこうもずかしくなっていって、とてもびっくりしましたが、教えていただいていくうちに、少しずつうまくつくれるようになっていったのでうれしかったです。

だけど、自分で作っているうちに、だんだんつぶれてしまって、高さがなくなっていってしまったので、形を整えるのがいがいとたいへんできれいにしても、つくっていくと、またつぶれてほっとして、とても楽しかったけどたいへんでした。

できあがった時に、われたり、くずれたりしていないかしんぱいだけど、はやくできあがった作品をみたいと思いました。

あと、福智山ダムの中にある、古高取の内ケ磯窯もじっみてみたいです。

古高取焼の形もみんな一人一人ちがっていろいろなこせいの古高取焼ができていたので、とてもいいなーと思いました。



植木小6の1　名前（岩木　雅輝　）

古高取を伝える会のみなさんへ

7月13日は、お忙しい中私達のために、植木小学校に来て下さりありがとうございます。私は、保育園でもこういう体験をした事があったけど、また作り方がちがいなかなか上手にできずにいたけど、教えて下さったおかげで上手にできました。ありがとうございます。それに、古高取についても深く知る事ができました。もようや形、色々な物がある事を知り、展示されている所に見に行ってみたいなと思いました。

今回は、とてもきちょうな体験させていただいた事、感謝しています。ありがとうございました。

植木小6の1　名前（戸次　一葉　）

古高取を伝える会のみなさんへ

今回は、私たちのためにお忙しい中来てくださり、ありがとうございました。私は初め簡単と言っていたので「すぐに出来るかはぁ」と思っていました。ですがやってみるとむずかしかったです。私は、保育園の時と5年生の時に似たようなことをしました。なので、楽にできる所もありましたがまゆしながら手で高くつくっていく所や高台をつくる所が少し、苦戦しました。そして、みなさんからのアドバイスやお手本があったので、無事につくり上げることができました!! ほめてくださったりして、焼いてもらい、できた姿がみるのがとってもわくわくします。「世界に一つだけの茶のみ」ときいて「自分だけの○○」っていいなと改めて思いました。とっても楽しい時間が過ごすことができました。ありがとうございました。

植木小6の1　名前（松尾　梨子　）

〈編集後記〉

今年も一年間が、あっと言う間に過ぎてしまったような感じがします。一年間を振り返って見ると何をしたのか？何が出来たのか？と考えてしまいます。

当会の毎回の活動が、将来、直方や筑豊発展のために少しでも役立っていれば嬉しく思います。そうなるように毎回の活動を大切にして、頑張りましょう。

今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

「古高取通信」会報・NO21

〈発行〉
古高取を伝える会

〈発行日〉
平成二十七年十二月二十八日

〈現在の会員数〉
正会員　五十四名（五十四口）
賛助会員　十八名（二十七口）
団体　一団体（一口）

〈マイ茶碗の数〉
五千二百七十一個

〈事務局〉
〒八二二-〇〇二六
福岡県直方市津田町七-十四
TEL〇九四九(二三)一三一一